

あつて、其の群衆の有様は、實に眼を驚かすばかりに盛である。然し、此の多數の信徒は、もと何から興つて、かく瀾漫したのであるかといふと、唯此の志比の山の中に隠遁して世を避けられた、一老比丘の影響である。私は此の度、永平寺に參拜を致しまして、驚嘆したる所は伽藍の大きいのに驚いたのではない、僧侶信徒の多いのに驚いたのではない、法要の盛んなのに驚いたのではない、此の山の深いといふ所から、たどり得た道に、眞面目なるもの、影響の偉大なることである。唯これ丈が、永平寺に於て悟り得た、事實上の學問でありました。

最後に、私は諸君と共に、道に眞面目なること、道元禪師の如くならんことを希はんとし、佛教の隆盛を期待するものは、一切の哩々連を捨て去つて、佛教精神の發揮に全心を傾くべきこと、眞正の道は、政權威力を離れて、自由なる人類の良心と理性との判断の上に、確實に基礎を置かるべきことを知り、之によつて、慕直に進むことを得たならば、たとひ其の理想の萬分一を達し得るとも、幸にして道元禪師の昔を偲ぶ資格ありと言はるゝに至るであらうといふことを、此に喜ぶわけ、あります。

## 第十七 日蓮上人の性格と日蓮宗

私は日蓮宗のことに就いては餘り多くを知らぬものであるから、これから御話をすることも、眞に自己一箇の考で、單に其の要點を申して責を塞ぐ丈のとてあります。

日蓮上人の出世せられました時代は、どんな時代であつたかと申しますといふと、言ふまでもない鎌倉時代である。鎌倉時代は武家時代であつた、恰も平安朝の公家時代の一轉した時であります。また之を佛教の方面から申しますならば、所謂鎌倉の新佛教として、幾多の高僧碩徳が現はれまして、種々の新宗派を創じめ、思想界の有様もこゝに一變の状態を呈した時でありました。日蓮上人の出世せられましたのは、即ち此の社會の狀態、並びに思想界の傾向がこゝに一大變遷をしようといふその時代であつたのであります。

政治上の變遷に伴ふ社會狀態の一般の歴史の上のことは、今こゝで精細に御話をする必要がない。佛教のことに就いては、少しく之を説明して置くが便利であると思ひます。日本へ始めて佛教の参りましたのは、誰も御承知の如く、今から千三百餘年前で、即ち欽明天皇即位の十三年といふのが一般の説になつて居る。夫から以後の佛教の様子は、一々申して居ては際限がないが、極めて古い奈良朝以前のことは、しばらく略するとして、桓武天皇平安奠都以後には、佛教に天台眞言の二大宗派がある。天台宗は傳教大師が御開きになつたので、叡山の延暦寺が其の中心であり、眞言宗は弘法大師が開かれたので、京都の東寺が其

の中心であつた。平安朝に於ける此の二大宗派の勢力といふものは、實に驚くべきものであつて、上は一天萬乗の君より、下りて大臣官僚、随つて庶民に至るまで、此の二宗派に歸依し、僧侶を崇敬する有様は、殆んど言語の外であつたのであります。斯くの如く上下の歸向盛なるにつれて、僧侶の間に弊風の生じてくることは免るべからざる自然の數なので、特に天台宗のことに至つては、殆んど言ふに忍びざるものがあつた。平安朝末に於ける叡山僧侶の暴行に至つては、言語道斷の次第であつたので、所謂僧兵と稱するものゝ亂暴は、叡山が最もひどかつたのであります。

叡山は今日も天台宗の本山になつて居るが、然し今日は最早非常に衰頹を極めて居る。平安時代に於ける叡山は根本中堂を中心として東塔、西塔、横川の三ヶ所に分れ、其の四周に存する寺院は叡山三千坊といふので、此の三千坊に住して居る僧侶の數も實に幾千といふ多數であつたのであります。それから叡山の山上には山王七社の権現といふのがあつて、これは此の山の鎮守で、末社がまた幾百といふほどあつたのであります。そうして此處に住んで居る僧侶は、實に綾羅錦繡紫緋燦爛たるもので、殿堂の莊嚴佳麗も、凡そ當時の力の限りを盡したのであつたのであります。それから下方の僧侶、イヤ寧ろ山上多數の僧侶は、腹巻を身に撰ぎまして武器を執り、頭は五條の袈裟で裹んで、所謂武装を致

しまして、一旦事ある時に臨んでは、此等の幾千の僧侶が、忽ち山王七社の神輿を根本中堂に振り上げまして、——尤も時によりては一社の神輿のこともあり、三社四社同時にかつぎ出すともある、これは朝廷なら朝廷で、叡山の僧侶の請願を御許容のないといふ様な時には、はじめるので、即ち神様が御震怒になつたといふ所であります。それから此の神輿が叡山を下りまして、幾千の僧侶神人に擁護せられて、京都へ押し寄せるといふと、叡山末の寺院神社は、悉く佛殿或は寶前の扉をしめまして、謹慎の意を表し、随つて京都の人々も、總べて恐れ入つて神罰の至らんことを畏懼したものであります。神輿は此の恐れ震へて居る所の京都人の前を、靜々と御わたりになりました。終に皇居の御門まで押し寄せる朝廷に於ても、當時は神佛の冥罰を恐るゝことがひどかつたので、此の訴訟事件は、十は十ながら到頭必ず許容せられたものであります。これが有名なる白河天皇の三不如意の嘆のある所以であります。

こんな有様の時代の僧侶が、肉食妻帯もせぬ持律堅固といふことは、固よりあり得べからざること、泥棒も、人殺しも、何もかもやつたのであります。叡山ばかりかうであつたのではない、三井の園城寺も、奈良の諸大寺も、皆殆んど之に匹敵するに足る丈の暴爲亂行であつたのである。鎌倉時代の新宗派といふのは、畢竟佛教の此の墮落の淵に沈んだのを見

て、之を肅清せんがために興起したものに外ならぬのであります。

鎌倉時代に興りました新宗派は實に多いものでありますけれども、要するに律宗と浄土宗と禪宗との三つが其の主要なものであります。今日日本佛教界で最も勢力を持つて居る浄土真宗の如きも、此の場合に於ては、單に浄土宗の一分派に過ぎぬのだと考へて差支がない。扱て此の三宗の中で、第一に律宗であるが、これは畢竟當時の佛教の墮落は、僧侶の品行の腐敗に起源するのであつて、佛教興起の道は、僧侶の品行を正しくし、戒律を振肅するの外はないといふ、即ち當時の僧侶の實際の狀態に憤激して起つたものであります。やう之を起した人は澤山にあつて、奈良で起つた南宗、京都で起つた北宗、種々の區別はあるけれども、大悲菩薩と勅諡號を賜はつた覺盛、興正菩薩と勅諡號を賜はつた叡尊などいふ人々は、特に當時屈指の高徳であつたのであります。丁度日蓮上人の時代に、鎌倉の極樂寺で、盛に律を唱へて居つた良觀といふ人は、即ち忍性菩薩と勅諡號を賜はつた人で、興正菩薩の律を承けた人であつたのである。

浄土宗は、法然上人の開いたものであることは誰でも知つて居る。此の未來的の宗派が鎌倉時代に大に興起したのは、どんな理由であるかといふと、私は當時の人情が、戦争の結果として、大に現世のたのむべからざることを見、悲觀的の考が盛になつたためである。

思ふのであります。私は日本の歴史を見まして、凡そ平氏滅亡の歴史ほど悲しい、果敢ない事實を見たことはない。清盛以來一族人臣の榮を極めて、大納言時忠が、平氏にあらざるものは人にあらずと言つた位、一門の公達は、花の如き婦女の手に擁せられて人となり、世界に苦といふものゝあるをすら知らなかつたのであります。然るに頼朝が關東に兵を擧げる、義仲が北陸から進んでくるといふことになつて、一朝にして榮華の夢は破れて、涙を抑えて一家一門が京都の地を立ち去つてしまひ、南海西海にさすらふことゝなつた。父母兄弟妻子は東西に離散して、音信を通ずるのよすがもない。ほのかに聞けば、今日まで戀しなづかしと慕つて居つた夫は、何處をこて討死をしたといひ、最愛の子供は何日の戰に首を取られたといふ。たゞにそればかりではない、一旦敵味方と分れて見れば、いたわしい敦盛の首も切らねばならぬといふ直實の悲嘆は、此の時代の武士には、兎角起り易かつた考に相違がなく、つまり世の中は頼みにはならない、榮枯變遷はこうもひどいものかとは、戰場に臨んで敵となり味方となり、切りつ切られつした武士の間にも、之を見て居た公卿殿上人一般の人の間にも、勃然として興らざるを得なかつたのである。私はこれが浄土教の、一時大に興つた唯一の原因であつたらうと思ふのであります。

鎌倉時代の武士は、斯ういふ様なわけて、知らず識らず人生の真相、生死といふ様なこと

に。つ。い。て。一。種。切。實。な。感。想。を。興。し。た。に。相。違。が。な。い。と。思。ひ。ま。す。然。る。に。當。時。の。武。士。は。ま。た。所。謂。軍。人。氣。質。で。極。め。て。質。朴。淡。泊。な。も。の。で。あ。つ。て。六。か。し。い。理。窟。な。ど。は。知。ら。な。い。平。安。朝。の。公。卿。な。ど。の。様。な。優。長。な。も。の。で。は。な。く。極。め。て。手。取。り。早。い。た。ち。で。あ。つ。て。且。つ。至。て。無。學。文。盲。な。も。の。で。あ。つ。た。の。で。あ。る。そ。れ。故。に。此。の。時。代。の。宗。教。に。は。簡。單。明。瞭。と。い。ふ。こ。と。が。甚。だ。必。要。な。一。の。條。件。で。あ。り。ま。し。た。當。時。支。那。か。ら。參。り。ま。し。た。禪。宗。は。恰。も。此。の。武。士。氣。質。に。は。恰。度。適。し。た。も。の。で。あ。つ。て。甚。だ。淡。泊。な。簡。單。な。宗。派。で。あ。り。且。つ。其。の。手。段。が。棒。喝。で。行。く。の。で。あ。る。か。ら。非。常。に。當。時。に。迎。へ。ら。れ。る。こ。と。に。な。つ。た。の。で。あ。る。當。時。の。禪。宗。は。主。と。し。て。臨。濟。禪。で。あ。つ。て。特。に。鎌。倉。に。は。蘭。溪。道。隆。が。支。那。か。ら。來。て。建。長。寺。に。居。つ。て。之。を。鼓。吹。し。た。時。で。あ。つ。て。こ。れ。が。恰。も。日。蓮。上。人。出。世。の。時。代。に。當。る。の。で。あ。り。ま。す。

日蓮上人出世時代に於ける日本の佛教界は、大凡こんな風であつて、要するに律宗といひ淨土宗といひ禪宗といひ、つまり種々の方面から當時の人心を解釋しやうとして出たものであつたのである。此の外にも昔時の盛観はなくなつたけれども、なほ天台眞言の二宗は、平安佛教の餘勢を擁して居たのであります。

私の考ふる所では、凡そ佛教には、人格を中心として立つて居る宗旨と、經典を中心として開かれて居る宗旨との二つの區別がある様であります。そして日蓮宗は、實に其の人

格中心の宗旨であると思ふのあります。斯く申しますといふと、或人は眞言宗又は念佛宗の如きこそ人格中心の宗旨であつて、日蓮などは經典中心の宗旨ではないか、何故なれば大日如來とか阿彌陀如來とかいふ様な人格的の佛陀を以て本尊として居る、これは即ち人格中心の宗派であつて、日蓮宗の如きは、南無妙法蓮華經といふから、經典中心と言はねばならぬではないかと疑ふてありましよう。又或人は、日蓮宗を人格中心の宗旨であると言ふのを聞いて、これ畢竟法本尊論に反對して、人本尊論を主張するものであらうと思ふ人もあるてありましよう。然しながら、私がこゝに人格中心といふのは、此等の人々の言ふ人格とは意義を同じくしないのである。

一跡、二千有餘年前の古に於て、釋迦牟尼如來が印度に出現し、佛教を開説せられてからこのかた、佛教が婆羅門教に反して、其の特色とし目せらるべき點は、全く人格中心といふことであつたと申しても、差支がないであらうと思ふのである。婆羅門教は佛教とは違つて、全く經典中心の宗教であつた。婆羅門教の所依とする所の『韋陀經』は、實に一切の婆羅門教諸宗派の中心であつて、如何なる婆羅門教も、『韋陀經』を離るゝとは出來ない。苦界解脱の眞實智は、唯此の經典によりて得らるゝのであつて、しかも此の經典は如何なる偉大の人があつて之を開示したのであるかと言へば、唯天啓的のもので、決して人間のこしらへた

ものではないとする。即ち佛教の經典は、釋迦と言へる偉人の事蹟を示すべきものであるが、婆羅門教の經典はそうではない、勿論梵天と言ふ様に、實在が人格的に考へらるゝことがないではないが、然しそれは人間と言へる事實を去ることの遠い、人間以上の理想的寫象としてもいふべきものであるが、佛教の釋迦は理想ではなく、歴史上の事實であり、其の事實的人格、即ち釋迦なる偉大の人格の感化活動が、佛教の基礎土臺であり、これが佛教に取つて、最も深い根底となつたといふとは、争ふべからざることであると信じます。釋迦滅後に於て、所謂佛身論の發達の結果、法報應の三身説となり、終に事實の釋迦を理想的にして仕舞ふ様にはなつたけれども、然しそれは、もと／＼釋迦といふ事實上の偉人を、遺弟等が景慕追懷するの餘りにこゝに出たので、これに思辨的思想が加はつたためなので、要するに釋迦在世に於て、其の婆羅門教に對して、特殊の大なる感化力を有したのも、理窟以上の偉大なる人格にあつたので、滅後の教理教義の發達も、常に此の人格を中心としたのであることは、少しも疑の存せぬ所であると思ふのであります。

私が人格中心と言つたのは、事實上の人格を言ふので、理想上の人格を指したのではない。阿彌陀如來、大日如來と言ふ様な佛は、人格的とは言ふことが出来るのであらうが、理想的であつて、事實的ではない。恰かも婆羅門教の梵天の如きもので、歴史上の釋迦の如きものに對して、事實的の宗旨と云うても宜からうと思ふのであります。

のではない。經典中心といふのは、經典上の理窟、或は經典中に説いてある佛を中心とするといふ意味で、人格中心といふのは、事實上の人格を中心とするといふ意味なのである。故に若し理想的佛を中心とする宗旨を、理想的の宗旨といふと、出来るならば、一方は之に對して、事實的の宗旨と云うても宜からうと思ふのであります。

日蓮宗は『法華經』を中心として居る。然し『法華經』を一の經典としては見て居ない。經典とは佛の言葉であり、佛の説法である。衆生は之を口に讀み、心に考へ、理解し、信仰すべきものである。然し私の見るところでは、日蓮上人は、『法華經』を以て斯くのごときものとは考へて居らぬ様である。日蓮上人は、『法華經』を以て三千年前の佛の説法としては受け取つて居らぬ。直ちに『法華經』を以て事實の釋迦——釋迦の實歴として見て居らるのである。若し『法華經』を以て、單に言葉として見、其の言葉の中に存する深遠の理窟は如何と心の中に考へる方から言ふたならば、或は十如是も出て來やう、十界互具も出て來やう、一念三千も出て來やう、三諦圓融も出て來やう、然しそれは既に支那に於て、天台大師が其の玄底を盡して居る。日蓮上人は、敢て之を再説することを欲しなかつた。獨り之を欲しなかつたばかりではない。所謂天台過時無得道て、理窟の『法華經』は時代に相應せずと言つて之を斥けてしまつた。即ち日蓮上人は、『法華經』を以て佛教の道理を説いた經典とはせず、釋迦と言

へる事實的人格の面影があり、と『法華經』に現はれて居る言は、と『法華經』は釋迦の實歴であり、空理空論ではなくて、直ちに釋迦に關する事實として見たのであります。

『法華經』を理窟的に見ずに、事實的に見て行くといふ日蓮上人の見地より致しますならば、『法華經』の文々句々は、何のことも述べたのかとは見ずに、其の文々句々が直ぐに釋迦の血であり、肉であり、『法華經』の全部は、佛陀の活動其のものであると考へて參ります。それ故に眞に『法華經』を讀むものとは、眼で讀むもの、口で讀むもの、謂てはない、獨りそればかりか、心で讀むもの、謂てさへもない、心で讀むものとは、天台大師の如き文々句々の裏面の深義に眼光徹底して餘さざるもの、謂である、然し、日蓮上人はそれさへも取らなかつた日蓮上人が佐渡へ流罪になる時に、弟子の日朗上人筑後阿闍梨に與へられました手紙の中に、

法華經を餘人の讀み候は、口ばかり、言葉ばかりは讀めども、心は讀まず、心は讀めども、身に讀まず、色心二法共に遊ばされ候こそ、貴く候へ、

と言はれてある事實を解釋するものは事實である、『法華經』は佛の實歴であり、佛の事實である之を解釋するものは、口さきの言葉でもなく、考へつめ、推しつめた理窟でもなく、身を以て之を行ふといふ事實である、釋迦の事實の虚偽なきことを證明するものは、我々の身、身讀とも、身讀とも、或は色讀とも、言ふのである。

『法華經』は佛の實歴であり、釋迦生涯の一大事實であるとすれば、『法華經』の上には、理智一體の佛陀があり、と眼前に映射するのである。久遠實成の釋迦本佛は、今もなほ、明に我々の前に見えるのである。日蓮上人は、自ら此の事實の證明者たることを期し、『法華經』に向つては、直ちに釋迦佛に面して、親しく出世本懐の一大事を受けたりと感じ、其の囑累品に對しては、自ら靈山會上、佛の囑累を受けて、此の『法華經』護持の大任を受けたものと信ぜざるを得なかつたのであらう。日蓮上人が、自ら釋尊の遺囑を受けたといふことを斷言して居られるのは、全く此の事を指すのに相違ない。上人が文永八年四條氏の妻に與へられた手紙の中に、

明なる事日月に過ぎんや、淨き事蓮華にまさるべきや、法華經は日月と蓮華となり、故に妙法蓮華經と名づく、日蓮又日月と蓮華の如くなり、

といふことがある。佛とは何であるかと言へば、智徳圓滿なるものと言ふのが、最も要領を得た言葉である。即ち智の明なるは、日月の如く、徳の清淨なる蓮華の如し、妙法は、智なり、蓮華は、徳なり、『妙法蓮華經』とは、文字ではない、智徳圓滿の佛、其の物である。今日蓮は實に此の

『妙法蓮華經』の證明者であつて、日蓮といふのも、智徳圓滿を表示するものだ、自分で自己の名を解釋をせられた。これは上人が自ら『法華經』の色讀者、實行者、證明書として、釋尊の遺囑を受けたものだと呼號せらるゝ所以であつて、また自ら本化上行菩薩の化身だと名のつて憚からぬ所以であつたのである。これは上人が本化の證明者たることを自覺したから斯く言ふのであつて、決して發狂者の譫言ではない。此の意味に於て、私は日蓮上人の生涯の事蹟、建長六年四月一たび七字の題目を唱へて一宗を開闢せられた卅二歳の春から弘安五年十月六十一歳入滅の秋まで、凡そ卅年間の生涯は、實に『法華』の實行活ける『法華』即ち『法華經』其の物であると見るのであります。

私は、之より進んで日蓮上人の傳記を詳に述べて、之を證明することを敢てしませぬ。唯『法華經』の文字は、佛の血であり、肉であり、『法華經』の上には、釋迦本佛の御躰が現はれて居ると、『法華經』を理窟の上からでなく、事實の上から、人格的に解釋をして參り、そうして、日蓮上人は『法華』の上で、直に釋迦佛に面して、末代流布の遺囑を受けて、之を身を以て證明せんとしたものだ、どこまでも事實的、人格的の感化といふことを宗教の中心とせんとしたものだ、と見たならば、私が日蓮宗を以て、人格中心の宗派であると言つたのは、強ち不當の言ではない、否、能く日蓮上人の眞意を得たものであるまいかと信ずるのであります。

鎌倉時代に興つた所の新しい諸宗派は、皆當時の思想上の要求を、種々の方面から解釋せんとしたものであつた。律宗は放縱不如法の平安末の僧侶に對する反動として、如法殊勝の僧侶を得んと願つた。當時の人の要求に適つた嚴肅派であつたのであらう。然し戒律は、主として外形上のことに關係したもので、唯これ丈で宗教的要求の全躰を説明し盡したものは、素より言ふことの出来るものではない。念佛宗は、當時の戦争が導いた悲觀的思想の要求に應じたものには相違はないが、然し未來といふ方面からばかり、當時の宗教的要求の全躰を説明し得たりとするのは、これまた覺束ないものであつたのであらう。禪宗の簡明な、手ツ取り早い、勢のよい宗風は、果して當時の武士の性情に能く合つたものであつたであらうが、然し、なほ其の悟道成佛を談ずるのは、理に墮ちたと言はねばならぬ。之を要するに、鎌倉時代の佛教は、之を平安朝の佛教に比較をするといふと、成佛得脱といふことに對しては、皆切實の要求に基いて現はれて居る、即ち非常に實際的になつて來て居ることは明瞭である。けれども、律にせよ、念佛にせよ、禪にせよ、悉く悟を開いて佛にならねばならぬといふ風に、求むる我と、求めらるゝ佛と相對して、こちらから向ふに進むといふ、つまり理想を望んで進んで行くのだといふことは、皆一轍に出て居るのである。直指人心、見性成佛と言つても、唯理窟のこと、悪く言へば空見識で、まさかこのまゝ、直ちに佛

だとは言へぬのである。そこだから禪宗は理に墮ちたといふのである。日蓮上人の事の妙法は此等の諸宗と大に其の趣きを異にするのであつて理想の佛に向つて進むといふよりは事實の佛を證明することが即ち我々の勤めであるといふ方から行くのであつて畢竟鎌倉時代の實際的佛敎を最も適切に表して居るものであると言つて宜しいのである。私は日蓮上人の此の鎌倉時代に於ける實際的解釋なるものが今日の宗教者に何事を教へて居るものであらうかを學ばんとするものであります。

### 時代宗教終

明治三十八年六月三日印刷  
明治三十八年六月五日發行

時代宗教與附  
定價金四十錢

著者 境野哲

東京市本郷區駒込片町十六番地

發行者 今村金次郎

東京市芝區露月町十八番地

印刷者 太田音次郎

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所 株式會社 英舍

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地



## 發行所

東京市芝區露月町十八番地  
電話新橋 三千二十七番

## 鴻盟社







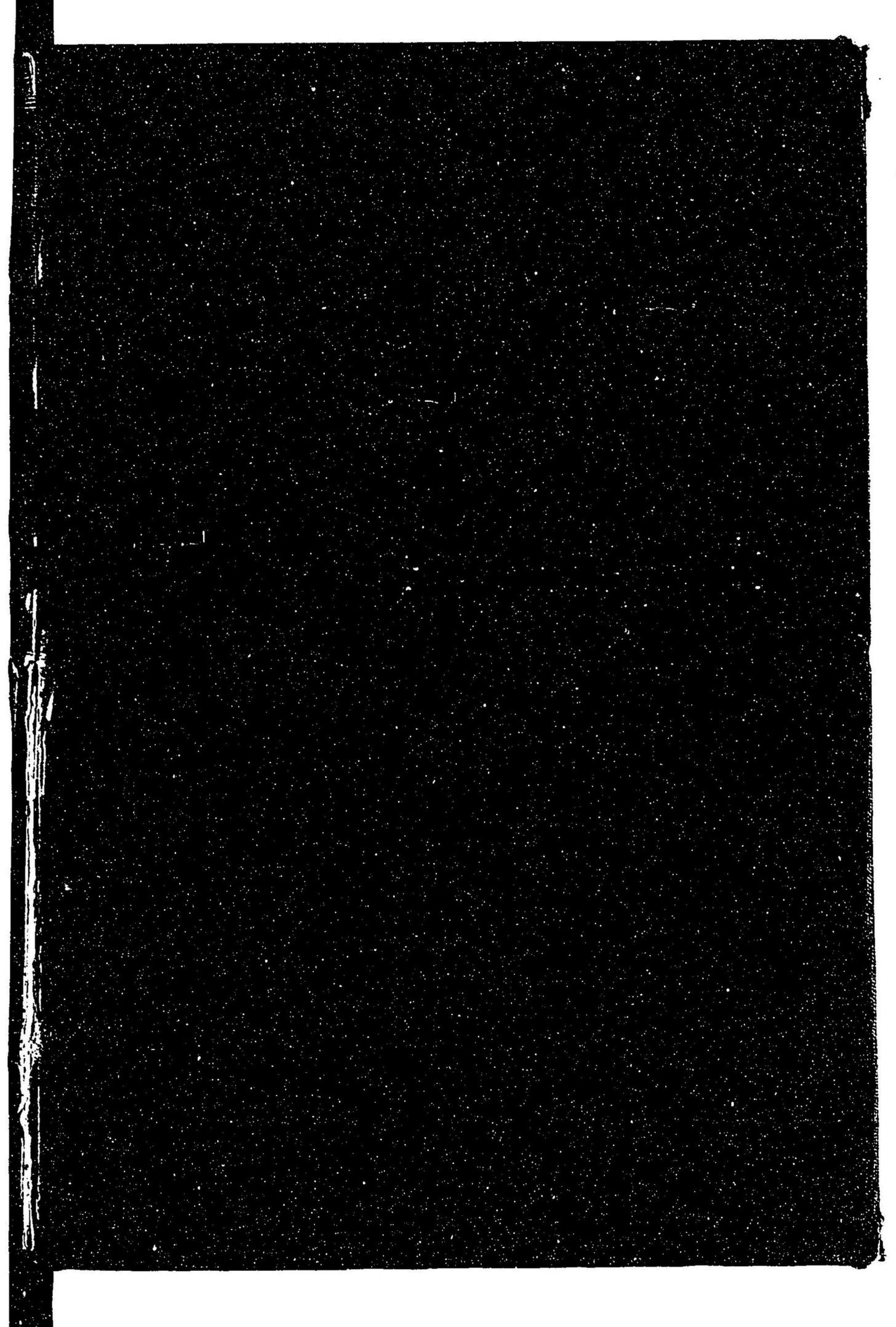
◀目書略版出社盟鴻▶

●皇室と永平寺の關係	●皇室と總持寺の關係	●十善の歌	●授戒和讃	●孝行和讃	●三福	●皇室と佛教との關係	●佛教安心談	●七福神	●父母の十恩	●觀音十大願講話	●延命地藏菩薩經講義	●彼岸會法話	●授戒の心得	●軍國民の覺悟	●軍國教悔	●軍人遺族なぐさめ	●軍人遺問	●電影斬風
全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册
定價金三	定價金三	定價金一	定價金一	定價金一	定價金三	定價金二	定價金四	定價金三	定價金三	定價金四	定價金四	定價金二	定價金二	定價金四	定價金四	定價金三	定價金三	定價金三
錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢

●なぐさめ	●持久	●平和	●軍人の理想	●佛敎の原理	●御敎諭の義徳	●精神福徳	●新青年	●天理敎秘密大全	●佛敎女子之敎	●大恩海一滴	●永平寺縁起	●總持寺縁起	●淨土宗信徒心得	●各宗布敎文庫	●護法	●布敎傳道	●護習會講演集
全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册
定價金一錢五厘	定價金一錢五厘	定價金一錢五厘	定價金一錢五厘	定價金一錢五厘	定價金一錢五厘	定價金一錢五厘	定價金一錢五厘	定價金一錢五厘	定價金一錢五厘	定價金一錢五厘	定價金一錢五厘	定價金一錢五厘	定價金一錢五厘	定價金一錢五厘	定價金一錢五厘	定價金一錢五厘	定價金一錢五厘
錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢

99

65



99  
65

013591-000-8

99-65

時代宗教

境野 貴洋(哲) / 著

M38

ABA-0059



